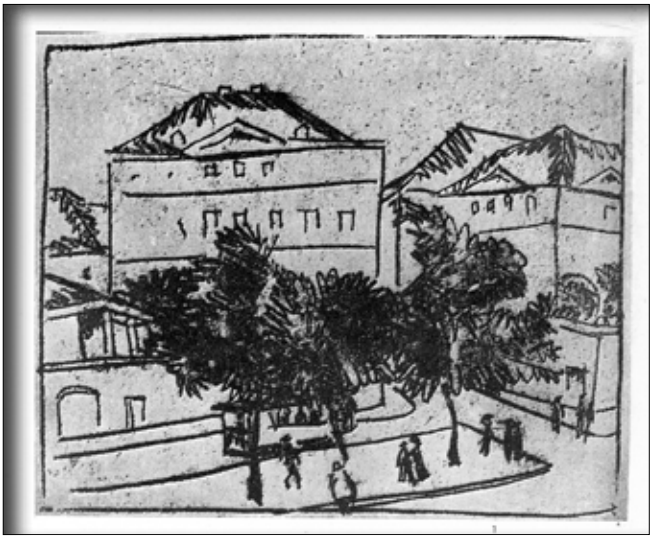
あさ

5

2013

井の頭動物園

どこまで自然に即しているか
真実の感情に基づいているか　　キルヒナー

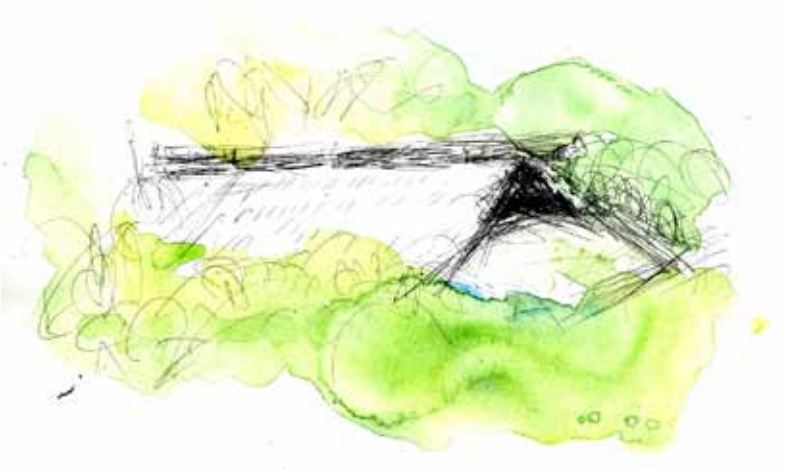


Kirchner
キルヒナー
ビルナの広場

ファブリ世界名画集
平凡社版より

あを

五　月



薔　薇

佐藤喜孝

花瓣と花瓣紅をたがへて紅薔薇

六月の薔薇と宇宙と渦を卷く

バラはバラを誇り花瓣を反らしをり

黄薔薇のひらかんとして朱を帶びし

バラ園の蚊帳吊草の丈低き

鐵片のごと泰山木の夏落葉

青しぐれ本郷通りの竹箒

ある所で漱石俳句集（坪内稔典編）を読んでゐたら「雪隱の窓から見るや秋の山」に目が止った。別に佳句とかではないのだが、便所の句が好きなのである。見慣れたわが家は別として、他所で使ふトイレの窓から見る景に興味がある。駅前の飲食店のトイレからは隣のビルの裏側が見えたりしてそれはそれで面白い。燈籠の火袋から見る景も同じように面白い。「便所より青空見えて啄木忌

寺山修司」を読むと昔八幡平へ行く途次の「好摩」の駅を想起する。あの頃の駅のトイレは何処も汚いのが当り前。が、ここは違ってゐた。清掃が見事に行届いてゐてにほひ一つしない感じがした。気持よく用を足してゐると郭公が聞えてきた。至福。私は厠の句を作るのだが上手くいかない。「厠から伸びをして見る冬駝鳥」「藥喰人の厠の小窓あけ」などノートに眠ってゐる。冒頭の「ある所」とは申訳ないが便所である。

鳥雲に

田中藤穂

臘梅や茶房店主の束ね髪

葬あと風の荒れきし春の駅

鳥雲にハモニカの音遠くより

青饅や四半世紀となる平成

樹液吹く春の木の立ち名を知らず

訃報また大輪椿紅曇る

茎立や掃き清めたる寺の庭

夏の夕昏れ飛鳥山の方から蝙蝠が飛んでくると、男の子達は木綿糸の先に小石をくくりつけて空へ向って放り上げる。蝙蝠は餌かと思って急降下してくる。でも小石に食らいつく事は滅多にない。でも男の子達はそれが面白いのだ。木下夕爾の句に〝少年に帯もどかしや蚊喰鳥〟というのがあるから、夕爾も少年の頃こんな遊びをしたのかも知れない。

一度家のガラス戸に蝙蝠が衝突して庭へ落ちたことがあった。兄達が拾ったのを近々と見たら、鼠に翼が生えたような気味の悪いものだった。

ゴム鞠やオハジキやビー玉は近所の玩具屋さんで買うが、お手玉は美しい端切れを使って母が作ってくれる。中に入れる屑小豆は乾物屋さんで安く売っている。（続）3・21

雪解

長崎桂子

児が駈ける中空に春兆しけり

抓まんとして丸まるや春の蜘蛛

隅隅に業行届く雛道具

雛あられカラフル故に気後れて

志野茶碗しづしづ点前雛の部屋

夕暮の瀬の音高き雪解水

雪解水水路満たして畑にまで

読み終えた新聞をしっかりと荷造りし、古新聞、古雑誌、ダンボールを、毎月一回決められた日時に集荷場所へ出しに行くのが、体に辛い時があったり、それに、気がついた時があったり、それに、気がついた時には時間が過ぎていて「しまった」と思う時もある。

先月もそうだったので、今月は先月分が残って居り、運動にもなるからと楽しい様に考えるが、五回も往復して終り、「やれやれ」と思い暫く座りこんでしまった。

この上もなく情けなく思う此の頃です。

春

早崎泰江

沈丁の挿し木に蕾友逝きぬ

クロッカス遊び心のやうに咲く

二羽三羽鴉の遊ぶ春の土

リハビリの送迎バスに春日射す

ふり向かず今を楽しむ桜かな

願はくば心の掃除春嵐

人通りなきしじまの中の夕桜

春埃

森　理和

堀内一郎さんを偲んで　二句

ハモニカや時に春風暴走す

ハモニカの音色は今も春の雲

常備薬水面一枚春埃

墓参り土手に菜の花あずさ号

糸桜不意打ち鯉の跳ね上り

お抹茶に息整へる花衣

長長と蝌蚪の紐置き今朝の池

兄が退院して、娘夫婦に付き添われて「傳」へ立ち寄ってくれました。

前々から、姪の連合いの方が、兄の手足の如くに面倒を見て下さっている話は耳にしていました。家の中では自分の事は自分で出来るらしいのですが、一人での外出が無理な事は一見して分りました。にこにこと優しく兄の信頼しきっている様子を見るだけで良く分りました。

家族に邪慳にされている様子を見て、気の毒に感じ親身にして下さっているようです。ご両親はもうおられないので実父と思うとは姪の話。こんなに優しい人との巡り合せた兄の様子を見て、本当に良かったとほっとしました。

他人(ひと)のために骨身を惜しまない、私には難題中の難題です。

★

吉弘恭子

歩けあるけ五臓六腑が春になる

妙齢の赤い靴下春一番

日のさして薄氷ゑみしごとくゆれ

吸はれゆく夕焼空へ春の鳥

蝙蝠傘濡れてるままに春の雨

むくどりの花踏みしめて二足歩行

あぶなげな空に冬芽のそつと立つ

全生園

赤座典子

春の園人も時間も緩々と

囀や順にポーズの車椅子

嬉々としてしゃぼん玉追ふ背中かな

飽きもせずゴム風船を蹴合へり

人気無き住宅通り陽炎へる

春の昼黙祷長くなりにけり

復興の言葉の軽さ霾れる

三月の珍しく暖かな日　近所に花見に出かけた。

国立ハンセン病療養所「多摩全生園」は　有数の桜の名所である。自然のままに天高く聳え幹は桜とは思えない程太く育っている。その他にも　様々な草花に囲まれた広場は沢山の人で賑わっていた。

お互いを撮り合っている老夫婦。介護職員に連れられたホームの人達。

子供を自由に遊ばせながら　母親達が　広いシートに座って　おしゃべりを楽しんでいる。

こんなに一度に子供達を見るのも珍しい。木の株に腰掛けて売店で買った花見団子を食べながらのんびりとこの風景を見ていた。心から平和を有難いと感じた一時であった

★

井上石動

しなやかな雨の吾が町沈丁花

すすり飲む湧水甘し独活の山

御食向かふ南アルプス斑雪かな

たんぽゝは基壇ぎはまで國分寺

菜の花をなびかせ快速中央線

春光やうつらとろりの嬰と祖母

初燕そして何日君再来

J1チームを持っている県なのです…

妻の手柄で格安のチケットが舞い込み、初夏の日差のような土曜の午後、甲府市で開催のヴァンフォーレ甲府の試合へ行く。対するはシュンスケのFマリノス。観客1万1千名。駐車場を出ると、「敵」の応援衆が、ゾロゾロと友好的雰囲気にて歩んでいる。いいなあ、こういう雰囲気。出店もいっぱい。いいなあ、こういう雰囲気。甲府軍のボランティアがきびきび働いている。いいなあ、こういう雰囲気。会場では応援団同士のエールの交換。いいなあ、こういう雰囲気。

大月市の人口が2万8千なので、市民の何と三分の一が集まった勘定。万単位の集まりが度々開催されているのだ。これぞ「文化」。

試合は、2対零でマリノス。よくないなあ、こういう結果。されど現在8位。悪くないなあ、こういう結果。

花

木村茂登子

人波の声なき声や花の道

花の下ブルーシートの一夜城

花冷えの動くものなきくもり空

校門は閉ざされしまま花盛り

弔問の家のさくらを哀しめり

クレソンに囁きかけて春の水

歌舞伎座のこけらおとしは春の雨

生ゴミの収集は月水金の週三日。烏よけの黄色い網の当番は一週間単位で廻ってくる。集塵車はだいたい二時頃に来る。その少し前家を出て網を畳んでいると乗務員が「今日は」と声をかけてくれる。私も「ありがとう」と云って終る。

ある日時刻を過ぎても車は来ない。通院の日だったのでイライラしていた。前の奥さんが出て来たのでそのことをコボしたら「私がやっとくからお出掛けなさい」と云い又「私もときどき留守してしまうけれど誰かがやっておいてくれますよ、お互いさまよ」とあっさり笑っている。そういえば私も当番でない日に気付いて片付けたことがある。しかし汚れ仕事は頼みづらい。があとで私には少し柔軟性に欠けているのかとも思はされた。

★

斉藤裕子

術前のリスク説明春浅し

浅き春俳句を捻る手術中

春炬燵悩む事すら放棄して

図書館で黙祷合図黄水仙

うつぶきてしかと伸びくるシクラメン

羽音たて烏往き交ふ彼岸かな

菜の花や父の単車は二人乗り

小学校低学年の頃だったと思う。父が通勤用の新しい単車（オートバイ）を買った。以前の物より大きくなった。

春の日曜日、父は私達兄弟を新しい単車に乗せて、隣町の叔母の家へ連れて行ってくれた。父の前に弟、兄と私は後ろの荷台。我が父の背中、兄が私の背中にしかとしがみつき、国道三号線を駆けていった。従兄弟たちとたっぷり遊んで、夕方帰途についた。叔母の家を出発し、少し走った所で、警察のバイクに捕まった。事情を話して、結局父は私達を一人ずつ乗せて三往復し、事なきを得た。

道路沿いの畑には一面菜の花が咲いていた。今では信じられない程、長閑な時代の、忘れる事の出来ない思い出である。

ヴァイオリン

篠田純子

春までよく生きたと泣けりヴァイオリン

春の宵離(か)るには惜しき人と居る

ジプシーの曲の震動春燈

手拍子の満ち千春の行進曲

すぐそこの東京タワーも霾ぐもり

春寒ししいしいと言ひすれ違ふ

寅さんもＡＫＢも出て花見

毎月第二金曜日の正午に、京橋の大根河岸跡で、大根が配られている。ここは家綱の時代から昭和十年まで青果市場があった所らしい。来年が丁度大根河岸ができてから三百五十年という節目で、毎月三百五十本の大根が配られている。

亀戸大根、練馬大根、小松菜、滝野川牛蒡、千寿葱、馬込人参、内藤南瓜、早稲田茗荷などの江戸野菜が商われていたと言う大根河岸は今、荷を運んだ運河も埋められ、上は高速道路となっている。

今日は暖かかったせいか、長蛇の列で大根の他水菜、しめじ、バナナを頂戴した。

帰りに近くの「ラ・ボエム」という店でスパゲティを食べるのも楽しみのひとつである。

子　　猫　　定梶じよう

踏切といふ冴えかへるところかな

口笛が今なら吹ける春の雲

和布刈舟うねりが擡げもたげして

行くところ盲導犬に風光る

ねずみとり沈めて春の小川かな

木の芽雨母のがり行く濡れるため

猫の子になつかる金を借りにきて

一句中に文語と口語が混交するのはやっぱりまずい、と私も思う。あるいは、文語遣いなら前句文語を遣って作句すべき、などとも言われる。

今月号の私の出句から例にとれば〈口笛が今なら吹ける〉。可能動詞は相当古くから遣われたそうだが、文語なら「吹かる」だろう。〈猫の子になつかる〉は口語なら「なつかれる」。そして、〈木の芽雨母のがり〉の句の「濡れる」は、中七に「母のがり」という古い古い言葉が遣われていて当然「濡るる」とすべきところだが、私の大脳は「濡れる」で宜しい、と指示して已まない。

私の中では、双方の垣根が低くなってきている、のかもしれない。

小笠原諸島

須賀敏子

春旅や二等船客相和して

ひたすらに南下千キロ島うらら

どこまでもボニンブルーの春岬

春の海亀重なりて悠然と

三月や勇魚の母子遊ぶを見

春の山都道南限より歩く

うららけし村営バスで岬まで

三月六日～十五日世界遺産の小笠原へ行って来た。二十五時間余りの船旅で父島へ到着。その日の内に母島へ二時間余り、ホエールラインの名前通り鯨が多く見られた。この日母島の宿は満室だと放送されていた。

母島乳房山からの海岸線は碧い。父島では船でホエールウォッチングへ。ベテランの船長が鯨を見つけてくれる。座頭鯨の雄姿に甚く感激。バンドウイルカの群が船に平行して泳ぎ、ジャンプする。

父島も母島も独特で豊かな生命溢れる自然を大切にしていた。

父島出航の折、太鼓の音と共に大勢の島民に「行ってらっしゃい」と見送られ、おがさわら丸には多くのボートが湾内ぎりぎりまで伴走してくれる。帰りたくなる島々だ。

★

竹内弘子

青山椒ひとのごとくに猫通る

春はやて犬の毛布が木の叉に

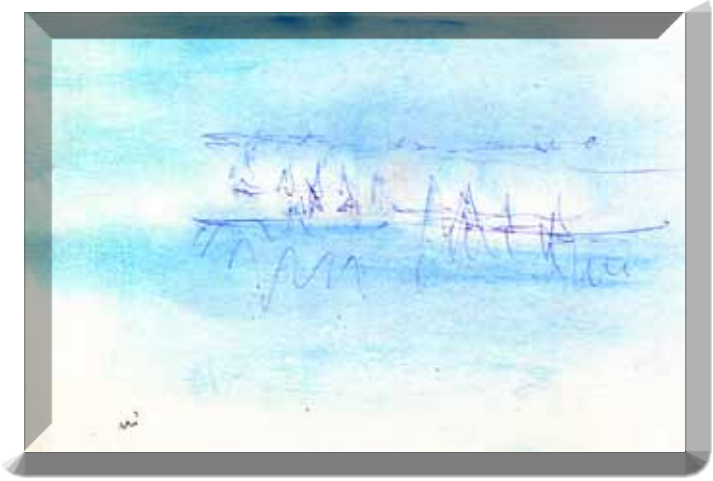
母の諭しいまこまやかに柿芽吹く

肋木の片側につく春の雪

葉桜やさらでも青き墓の径

亀鳴くやおほかた読めぬ碑の文字

石洲の毒の粉いろのねずみもち



四月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

宇宙遊泳してゐるくだらくわんぜおん　佐藤喜孝

中学の頃、友人達と「心に残る仏像」について話したところ、百済観音派と阿修羅派に別れた。私は百済観音派だった。適度に力の抜けた姿は見る人に安らぎを与える。宇宙遊泳という表現は新鮮だ。ひらがな表記も百済観音の魅力を伝えていると思う。（篠田純子）

鰭酒や軍歌春歌とわかちなき　竹内弘子

軍歌と春歌が同じとはまた痛烈に風刺の効いた句である。私の父は機嫌のよい時は故郷の秋田民謡や軍歌を口遊んで仕事をしていた。明治生れの父には軍歌をいつの間には覚えたはやり歌の一つと違はぬのではないか。三味線のない酒席では唄に会はせるのは手拍子であった。いまはこういふ光景に出合はなくなった。冒頭風刺といったが「軍歌春歌とわかちなき」は同世代への挨拶にもなってゐる。それにしても鰭酒は弘子さんには合ふが醉歌にはふさはしくないかもしれない。

淡雪や老いて銀座も遠くなり　田中藤穂

私もむかしは目的もなくよく銀座へ出掛けてゐた。作者もふっと、淡雪を契機に足が遠のいた昔日の銀座を思ひ起した。きっと好い思ひ出が一杯詰ってゐることであらう。中村草田男の「降る雪や明治は遠くなりにけり」の本歌取りであれば、「銀座も遠くなりにけり」。といはぬところに作者の俳句へのやさしさがうかがへる。

人住まぬ家にまばゆき屋根の雪　　早崎泰江

町に降った雪は当座はきれいだがあっといふ間に踏みつけられ汚れて塵芥とかしてしまふ。わずかにお屋敷の庭、鉄条網に囲まれた空地などそのまま残ってゐる。しかし屋根の上だけは雪にとって別天地。日当りもよく本来の白を保ち日を返して雪は天寿を全うしてゐる。人住まぬ家は屋根はともかく庭もきれいに雪が残ってゐるのであらう。観察の利いた作品。

観察眼と言へば「落葉踏む猫にも老いの兆しあり　泰江」にもうかがへる。猫好きなのであらう。さうでなければかういふ見え方はしないもの。私には全く分らないが、歩き方で猫に老いを感じるとは猫への愛が一入と思った。

蝋梅や次の休みに兄来ると　　森　理和

邂逅を待焦がれる、いそいそとした喜びが伝はってくる。「来る」と確り終らず「来ると」としたことでその感じがつたはる。滋味とも思へる蝋梅にことよせる兄への思ひである。

春の燈や高き声洩る博奕宿　　井上石動

男の人は、子どもの時から博打打ちである。メンコ、ベーゴマ……長じて競馬、パチンコ。この句の博奕は勝負の早い、サイコロか花札かとおもふ。宿は素人の博奕宿で宿屋の意味ではない。作者は春の燈を軽蔑しつつも、羨望してゐるのではないだろうか。宿をマークしている私服警官も見えるようだ。（篠田純子）

鳶の笛上国甲斐は春のなか　　井上石動

大らかな句。〝上国〟が私には耳新しい。知らぬ言葉なので直筆原稿なら〝上〟だか〝土〟だか目を凝らして確かめるのだが、メールでいただくのでその危惧はない。10世紀頃の延喜式に

国力のちがひから大国―上国―中国―下国と分けた。上国は35カ国。越中・駿河などと共に甲斐国が含まれる。ちなみに中国は11カ国。定梶じょうさんの能登国が含まれる。下国は9カ国。そして私の住む武蔵国は大国に含まれ13カ国である。みなWikiPediaの受売り。

冒頭に書いたが本当に大らかな句である。〝鳶の笛〟にしても何時もの私なら見向きもしない手垢の付いた常套句である。ところが、掲句の中に置いてみると欠点が美点に化してしまふ。上国といふふるさと自慢も気持よく受容できる。調子もよい。春のなかといふ包込むやうな季語の使ひ方も優しくてよい。句とは不思議なものだとつくづく思ふ。

鵲村字小鮒江の春の水　　田中　藤穂

をふとおもった。

セロリトマト食べ三月を迎へたる　　大日向幸江

もし妖精がゐたら何を食べるであらう。セロリ・パセリなどふさはしいやうにおもふが。トマトも悪くはない。こういふものを食べてゐたら穢れた人間も妖精に近づけるかも知れない。半妖精と化して迎へる三月。二月でも四月でもないところがよい。だうよいか説明するのがむづかしい。三月は東京大空襲や東北の大津波及び原発事故と思ひだしたくないことがおきた特別な月になってしまった。がこの句は

三月の甘納豆のうふふふふ　　坪内　稔典
三月や人のきれいな膝小僧　　坪内　稔典

と同じく三月といふ季節感、ひびきを大切にした句である。

歌舞伎座のつるりとむけて春を待つ　　篠田純子

今年の四月二日、新歌舞伎座がお披露目をした。前書に「落成まぢか」とある。作者は工事中の歌舞伎座の前をしばしば通る環境にある。

建築中の建物はシートに覆われてみることができない。できることはシート一面が春一番に生きもののごとくはためくことと、中の様子を想像することぐらいである。何ヶ月も目隠しをしていたシートがある日通りかかると無い。そしてそこには新しい歌舞伎座がどっしりと建っている。この感動を、驚きを「つるりとむけてと」諧をもて表現し得た。あとは落成の春をまつばかりである

図書館が閉館の森梟啼く　　定梶じょう

「閉館の森」の「の」がこの句を深めてゐる。閉館する図書館より森に主眼が置かれてゐるのである。「森」そのものが別れを惜しんでゐるやうだ。このやうなお伽の国のやうな図書館が身辺にあればなあとおもふ。あったものが無くなるとなれば尚更である。図書館と梟は付き過ぎといふ方もられるかも知れぬが、ここの梟は梟でしかない。

如月や錦眼鏡に倦きもせず　　須賀敏子

万華鏡（まんげきょう）としか知らなかったので句会で「錦眼鏡」といふ言葉に出合ひ、意味を知った時は嬉しくなった。調べると他にも万華鏡（ばんかきょう）・百眼鏡・百色眼鏡・覗き眼鏡などとも言ったらしい。万物動きの少ない如月に錦眼鏡でひとときを過す。内容を言葉にすると他愛のないことだが、如月と錦眼鏡の語彙の組合はせが醸す古色を帯びた雰囲気もよい。

坂多き函館元町雪明り
吹雪止み函館山に長居せり　　赤座典子

作者は最近作句に力を注いでゐる。昨年函館を訪れた筆者には、冬の北海道をだう読むか興味をひいた。季節は　違ふが同じ場所に立った

日のことを思ひだす。「道南冬の旅」は素直な写生句に徹してゐる。破綻がない。高島茂は旅行吟を詠むのに精力的であった。一二泊の旅で五十句、百句は当り前である。巻紙や半紙に墨痕鮮やかに書かれた。それを間近に見てゐたからか私も旅吟は嫌いではない。嫌いではないのだが吟行を含めて苦手である。気に入った句はなかなか出来無い。

滑り台ジャンプ台皆青氷

この句は何時もの作者の目が働いてゐる。旅情におぼれぬ確かな目で対象を詠んでゐる。作品にするに旅情・旅心は厄介なものであると改めて思った。

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2013年6月号

〈特集〉壮絶な最期とその句集
最後まで命の炎を燃やし、人生を俳句に託した壮絶な句集を読む！
折笠美秋『君なら蝶に』…依田善朗
江國滋『癌め』…坂口昌弘
野村秋介『銀河蒼茫』…水津哲

〈グラビア〉俳句界NOW 大坪景章

作品 小路紫峡 能村研三 小川玉泉

特集 俳句と宗教
◎仏教と俳句 花谷和子
◎神道と俳句 波戸岡旭
◎キリスト教と俳句 稲畑廣太郎 他

全文掲載！ 第13回俳句界評論賞
「旅と俳句」入選作品発表
＊セレクション結社「歴路」(主宰・向田貴子)

私の一冊 福島せいぎ「なると」

魅惑の俳人 攝津幸彦

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！ 片山善博（政治評論家）

＊一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

前月抄

宇宙遊泳してゐるくだらくわんぜおん　佐藤喜孝

鰭酒や軍歌春歌とわかちなき　竹内弘子

淡雪や老いて銀座も遠くなり　田中藤穂

寄鍋や風吹き荒び積る夕　長崎桂子

人住まぬ家にまばゆき屋根の雪　早崎泰江

蝋梅や次の休みに兄来ると　森　理和

一太刀をあびし柘榴の揺れやまず　吉弘恭子

淡雪のスペイン瓦煌めかす　赤座典子

鳶の笛上国甲斐は春のなか　井上石動

セロリトマト食べ三月を迎へたる　大日向幸江

行き過ぎてマスクとマスク振り返る　木村茂登子

歌舞伎座のつるりとむけて春を待つ　篠田純子

図書館が閉館の森梟啼く　定梶じょう

如月や錦眼鏡に倦きもせず　須賀敏子

滑り台ジャンプ台皆青氷　赤座典子

喜孝　抄

一郎わすれぐさ

行く春や大隈像は杖を突き

久し振りに吟行に参加した。昔、大隈講堂で徴用者の壮行会があって、詩吟神風流岩淵神風が大楠公「豹は死して皮を留どむ」を詠ったのを覚えている。新入生歓迎の応援団の騒ぎの中を大学構内に入る。五号館、一階の坪内逍遥記念館、二階の六世中村歌右衛門特別記念室、三階では古代の伎楽、記念室、三階では古代の伎楽、舞楽、散楽と中世の能、狂言、近世は歌舞伎人形浄瑠璃、新派、新劇、新国劇、喜劇ミュージカルまでタイムスリップ。最後は秋艸道人の書並びに膨大な中国の蒐集品には驚いた。俳句は出来なかったが、興味津々大変勉強になった一日。　帰路、夏目漱石終焉の地猫塚，多聞院の松井須磨子の墓と，皆様には忙しい思いをさせて仕舞った。深謝。

〈二〇〇六・五・一〉

寺の縁切るかきらぬか躑躅緋に

フアックスも良し悪しで毎朝9時前後にパソコンの宣伝が入る。ボタンを押して、それが解ると消す。少ししてまた、すぐストップ毎日だから閉口している。ある日も出版社から私の一句を書面に句文集を勧めてきた半頁一句三，八〇〇円。若一つは広告社で、あなたのホームページが好評だから新聞に掲載したいと言う。これも幾ら掛るのと、聞くと24万円也。真に受けて感激して参加する人も多いことだろう。居留守を遣っていたら、その後何にも言ってこない。皆様も慎重に。

〈二〇〇九・五・二〉

銀座八重桜観桜会

二〇一三年四月六日

さくら蕊ほのとあかるき色もちて　恭子

古ビルの中にガス灯春闌る　純子

奉行所の跡といふ駅南吹く　綾子

芽柳の舞って低気圧来たる　美代子

春嵐兆しは西の空の色　理和

花曇奉行所跡の大きな石　典子

春の風三人ならぶ靴みがき　喜孝

能登だより（3）

定梶じょう

先月号の下手な文章の中で少し触れましたが，ある句を褒める人と批難する人があることの不思議でないのが俳句。短い詩型である所為でしょうが、その落差が大きすぎる。ことに石川県ではそうなのです。

むかし、隣県富山の『雲母』定例句会に毎月出席していたことがあって、ちょっぴり隣県の俳句事情にも詳しくなっていたのですが、富山では『ホトトギス』と他の系列の間に余り区別はなかった。

それに、所謂「前衛派」の俳人が沢山いたのも富山県なのです。当石川県でも近年、所謂「前衛派」の同人誌が何誌か刊行されていますが、以前にはなかったことです。

悪くちになってしまうのを恐れながら敢えていえば、当県の『ホトトギス』系の方々は自分達の周辺の句しか読まない。使う歳時記は『ホトトギス』のもの、と決まっていますから、そこに収録されていない季語は一切知らない。知る必要がない。

『ホトトギス』系の地元の句会に出席していたむかし、〈燈台や雪間の畝に三月菜〉を投句しました。雪間の語がやや窮屈だ、と評されたのですが、念のため彼らの歳時記を確かめたところ載っていない。句歴六十年を越える長老の方が「雪間」の語を知っていて話は落着しましたが、一事が万事こんな具合。そもそもこの語は、季語である以前に普通名詞のはずです。あるいは、〈すが漏りの吾ぎ家ゆふぐれ灯さうか〉の拙句も、すが漏りが載っていないから知らない。友人の句寿夫さんもこの語を遣って不思議がられたそうです。

まだあります。〈河童忌のあした不死男忌黒麦酒〉。芥川龍之介の忌日は七月二四日、秋元不死男は二五日。しかし彼らの歳時記には河童忌も不死男忌も、そしてビールもとりあげられていません。拙句は俳句以前、彼らにとり体をなさない文章、だったのです。あるいは「春一番」の語もそう。昭和三〇年代に季語として認識されてきた新しいことばのようで、昭和三四年刊の平凡社『俳句歳時記』（大変優れた歳時記です）には解説文があっても例句はありませんし、私の持つ三十八年刊『波郷編現代俳句歳時記』には解説文があっても例句はありませんし、私の持つ三十八年刊『波郷編現代俳句歳時記』には「春風」の傍題としてゴシック体でのせられていて、簡潔な説明文がつけられていますが、例句はありません。それでも、以降刊行された各種の歳時記には必ず掲載されていますが、『ホトトギス新歳時記』には今以てこの語はない。しかしこれらの語を収録しない歳時記を批難しているのではありません。これらのことばを知らない俳人を批難したいのです。『ホトトギス』系の俳句しか読まないことを遺憾だと言いたいのです。自分たちの俳句以外を「流派が違うから」と言って敬して近よらない彼ら彼女らは、なるほど高浜家を宗家、家元と仰ぐ一派、と観じた方がいいのかも知れません。私の悲憤に似た物言いも、身内が『ホトトギス』の句しか知らずに終ったことへの憾みでもあるのです。

思わずまえ説が長くなりました。先月号で述べました通り、結社を越えた合同句集。その後十数年を経て再び句集刊行が話しあわれました。兄が刊行委員のひとりでしたので出句には応じましたが、私自身境涯の変化等があったりしてその後の詳細を知らずに居ました。今回、市立図書館で手にしたのは『続句集こんぜん』が初見だったのです。

前回の出句者七五名のうち、続刊にも句を出した方が二五名ほど。のこり六〇名の大よそは初刊の後に俳句を始めた方々。経験の差がみてとれる合同句集ではありました。

涅槃図の月が最後に捲かれけり　　市堀　玉宗

曹洞禅の坊さまの句。

此処にまた蛙轢きつぶされてをり　　池越伊豆子

季節になると珍しくなくなる景。作者はこころ傷めているのです。

小在所のここにも空家黄たんぽぽ　　伊藤　小華

作者の住まう在所十数軒のうち、空き家は今や手の指を折るに足りなくなった。

新緑のころの空とし濡れてをり　　柴田　道人

暮れなづみをりしがくれて螢とぶ　　々

秋の風満艦飾に来て騒ぐ　　々

三句目の「満艦飾」は、本来軍艦に限って使われることばかもしれませんが、漁船なら大漁旗、商船では新造の時に甲板を旗で飾りたてる、等も満艦飾というようです。船員さんの一句。これらの作者、道人さん。近辺の『ホトトギス』系の中では最もうまい。そしてホトトギス同人に迎えられたのも古いという。

春昼や血液回路拍動す　　竹森　筍子

この方も句歴が長い。晩年を腎透析で苦しまれた。

「春昼や」が悲しい。

朝寒や潜る用意の煙上ぐ　　中本　富女

この方の、少々距離はありますが隣り町といっていい処に輪島海女町があります。

炎天や烏賊釣り船の大電球　　早見行々子

船溜りに船体を休める烏賊船の、昼は灯さぬ電球。確かに大きい。その電気の芯がこころ細く見えるのです。しかし夜を迎えると。

待春の心に吾子の下船待つ　　南　まさ子

比較的句歴の浅い方ですが心情の吐露に素直。巧まぬうまさがある。

芹摘むも子守がてらの事なれば　　森谷　畦道

『ホトトギス』では一句入選すると赤飯を炊いたという、そんな頃からの俳人。「初の句座」とする人の多い中でこの方は「初句会」と書いていた。ただし、取合せの句は一切理解し得ない方だった。

挙げさせてもらった九人のうちホトトギスが六人。いい俳句とそうでない句の別があるだけで、結社の違いなど意識すべきでない、その通りと私も思いたいのですがなかなか。市役所広報中の句会報はホトトギス系、各地区公民館の館報もホトトギス系のみ、等々のように、いやでも目についてしまうのです。そして近年、それらの句会では講評がなされていない。新しく俳句作りを始めた方々の上達に結びついていない。万太郎はむろんのこと、秋桜子を知らない、楸邨を知らない。誓子を知らず不死男も知らない。虚子の弟子の一人であるはずの草田男でも〈明治は遠くなりにけり〉は聞いたことがあっても〈あたゝかき十一月もすみにけり〉は読んで理解できない。なさけないことですが、こういう俳人の集りが確かにあるのです。田舎だから、ではすまされぬことなのですが。

獐回頭

高島茂　選評

沙人ありし瓦人ありし日蟬しぐれ　　堀内一郎

沙人は『石楠』の俳人で後に『俳句人』にも加盟した石原沙人氏の事で、戦前「文芸春秋」に在籍され、戦中満鉄におられた。石原青龍刀のペンネームで川柳を作るかたわら川柳の指導にあたられた。「京劇」の本なども出しておられる。沙人先生とはいろいろの思い出がある。その一つだけを。終戦になって、大陸から帰られた先生は無一物。やっと雑誌など刊行出来るようになった、『文芸春秋社』に一時帰った。そのころ人の噂で、先生を知らない人の言葉。文芸春秋社には、まことに態度のでかい、無礼な玄関の受付けがいる。この社を訪ねる人と時に喧嘩にもなりかねないあり様。当時の社長の池島信平より偉いのである。うまく勤まるはずもない。その頃銀座の交詢社の一室で、中国（当時の満州、支那大陸）に在住した俳人たちの集まる句会が毎月催された。私も参加した。はじめての時沙人先生の隣に席をした。先生が煙草を吸っているので、私も喫おうとしたがマッチがなかったので、先生火を借してくれませんかと云うと、自分がいまマッチを擦っておりながら、無いという一言で断られた。それ以来沙人先生が大好きになった。瓦人は「秋」の同人で印刷会社を手広くされていた神谷瓦人氏である。現代俳句協会に所属して、俳人たちの出版記念会や会合があると、助手の女の人と毎回俳人たちの写真をくまなく撮りつづけておられた。私も幾度か恩恵にあづかり、その写真を送って貰った。瓦人氏

は絵画・書・陶器とはいわず、俳書の蒐集に力を入れられた。お二人とも得がたい先達であった。一郎さんもこの二人に近い人である。『石楠』では一郎さんは沙人氏の後輩。蟬の声が聞える頃になると、懐かしい人柄を思い起こすのである。私もこの句のお蔭をこうむった。

梅雨兆す猫が魚のやうに跳び　　竹内　弘子

魚はときおり水中から跳びあがる。飛魚のごときは、鰭を翼のごとくひろげて何メートルも海上を飛ぶ。鯨、いるかも跳ぶ。動物は跳ねたりとんだりするのは習性である。猫が跳ぶのはあたりまえである。なにかに驚いたりするとバネを利かせて飛ぶ。この句は魚のやうにという形容が見事に決っている。梅雨兆すで凄味も出た。

泰山木慈母観音の看護哉　　伊萬里梅城

梅城氏はこの六月に東京の病院で手術された。五日に抜糸をされ十二日に退院された。完癒されるに二、三ケ月要するとのことであるが、元より健康で普段の養生がよいので快癒する日も早いと願っている。この句は病院での作である。庭に泰山木の木が茂って大きな蕾をもっているのであろう。慈母観音は病人をみとる看護婦さんのことであろうか。御仏につかえる師にとって看護婦さんも慈母観音に思うのである。ご自愛のほど。

御覧じろ枯木にぱっと桜咲く

土牢を守る走り根花すみれ

親王の悲しき最後花馬酔木

初音よし谷渡り今稽古中

片時も離(か)れぬうぐひす御首塚

土器(かわらけ)を石に打ちつけ春闌る

落ち椿いまはのきはのあたたかみ

春の土耳傾ける薬師の目

蓮華座の裾にからまる春の風

桜冷え十二神将目を剥けり

春の鬱祓ふ薬師の目の強き

吟行のご案内（大宮氷川神社）

日　時　五月二八日〈水〉十時

集合場所　JR大宮駅

詳細は参加者各自へ

（前号お知らせより日時変更あります）

電話　090-9828-4244

申込〆切　五月二〇日　佐藤喜孝まで

あとがき

「能登だより」に筆者の慨嘆が聞えるが、私はわたしで虚子の選を受けてみたかったなあと、心残りの思ひで読んでゐる。

力なき月の出でをる涅槃絵図

と涅槃図中の月はいろいろ詠まれてゐるがこの句の面白さには適はない。涅槃図がしまはれる時の臨場感、最後に月が見えなくなる様を想像するとその場にをられる人のため息が聞えさうだ。また

暮れなづみをりしがくれて螢とぶ

は螢がでるまでの時間をじっくりと描く。これ又詠んでゐて楽しい。なん回か口中で繰り返す。

炎天や烏賊釣り船の大電球

など詠者は見慣れた事物であらうに、炎天の中で捉えた裸電球の鮮度は見事である。

私も筆者に嘆かれないやう先人の句を読まなければと自戒したところ。

（喜孝）

ご厚志多謝

東亜未　様

二〇一三年五月号

発行日　五月五日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／恩田秋夫・松村美智子
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。